〈新収品〉紹介

古代中国の珍しい美術品「彩漆山水人物図琴台」について

今秋の名品展で初めて公開され、来年早々から開催される「東洋の漆工」展にも陳列される重要な作品に、彩漆山水人物図琴台があります。この作品はもう30余年前にある美術雑誌に原色版で掲載され、当時の所蔵者であった東京美術学校助教授鎌倉芳太郎氏が「顧愷之（こがいし）の画論と鳳凰琴附属琴台に就て」と題した研究論文を発表され、専門家の間に大きなセンセーションをまき起こしたものでした。しかし現品はこれまで全然公開されたことがなく、ごく少数の人々を除いてはその所在も知られずに今日に至ったものです。この度全くの奇縁でこの名品が本館の所有に帰し、一般に公開されることになったのは、まことに御同慶の至りと思います。

この台は写真に見られるような形ですが、脚は折りたたみ式になっている珍しい構造です。大きさは横80cm、幅26cm、総高25cmです。天板の部分の地は洗朱（あらいしゅ）とでもいうべき赤色で、図は下辺に岩石に松、竹、芭蕉などの草木を配し、中央の大岩窟内には一人の仙人が亀を前に安坐しています。上辺には山岳と飛雲が点在し、左右には各々一人の仙人らしい人物が捧げ物をもち、雲に乗って画面の中心に向って、即ち大岩窟内の仙人に近づこうとしているかのように見えます。色彩は青、緑、黄、白その他濃褐色等、多種多様ですが、すべて漆を材料とししかも描いたものではなく、図様の各細部を彫ってから色漆をたらしこみ、表面を平滑に研磨したもので、中国語の塡漆（てんしつ）、日本語の存星（ぞんせい）という技法に該当するものと見られます。側面の三方にはやはり色漆で竜と牡丹が表わされ、天板と同様、外縁部は忍冬唐草文で飾られています。側面の残る一方は下部を約4cmくりあげて、演奏者の膝が入るようにし、地には他の側面のような彩漆の装飾は施さず、全体を褐色の漆地とし、その上に蓮華唐草文をいわゆる沈金彫（ちんきんぼり）で表わしています。他にまだ類品が見出されていないので、製作年代や用途を断定するのは今後に課せられた懸案というべきでありますが、時代は中国の南北朝に遡ると見てよろしかろうと考えています。この作品の伝来もはっきりしているのですが、ここでは省略します。とにかく東洋漆工史上は言うまでもありませんが、伝世された遺品の非常に少ない時代ですから、絵画史、文様史、楽器史等の観点からも、この作品は将来大きな話題の対象となることは疑いありません。

季刊 美のたより No.22
昭和47年10月1日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.